

筋少説

第一夜

機械

原案・筋肉少女帯  
作・醍醐頼樹

筋少說第一夜

機

械

作：醜醜賴樹

原案：筋肉少女帶

今、彼女が空に向ける機械は

この作品は筋肉少女帯の名曲「機械」を参考<sup>モチーフ</sup>に醍醐頼樹が、書き上げたオリジナル作品であり、筋肉少女帯並びに、大槻ケンヂ他、各メンバーの関与は一切無い。

ああ、ここに来るのもう、三回目にもなるのだなあ。

額から玉のように流れる汗を拭きながら、森の中にひっそりと建っている館を見上げた。この真夏だって言うのに、館周辺には冷気が漂っているようなそんな雰囲気だった。

やっぱり、誰も来ちゃあいないか。そりゃあ、の戯言なんて誰も聞きやあしないよなあ。館の周辺にぬかるんでいるというのに足跡がまったくないことを確認し、やっぱり来なければ良かったかもしれないなあという思いにとらわれる。

門を開け、泥濘ぬかるみを通り、大きな扉をノックして、教授が出てくるのを待つ。が、返事がない。留守か。いや。あの人がここ以外に行く場所なんて無いだろう。何かに手間取っているのかも知れない。仕方ないな。胸ポケットからタバコを取り出し、一服しようとしたとき、扉が開いた。

越谷氏こしがやだった。妙だな。いつもだったら奥さんが開けてくれるはずなのだが。

久しぶりにみる教授の顔は、五〇代と思えないほど老けていた。髪の毛は白く、皮膚はまるで死体のように土気色をしていた。目はくぼみ、血走っており、唇はがさがさだった。

「久しぶりです。越谷教授。覚えていますか。週刊レテイクルの大城文明朗おおしろです。本日はよろしくお願いします」

私は名刺を差し出したが、教授は興味ないといった感じで「どうぞ。お入りください」と、私を中へ促した。

教授の声は、八〇代の老人が話す声のようなしわがれたモノだった。教授……というのは、マスメディアが彼に付けたあだ名であり、実際には彼は教授でも何でもない。

数年前、参議院議員選挙に出馬した際、特許を数多く申請していた彼のことを、マスメディアはそう評していた。

色物扱いだった彼は当然のごとく落選した。

落選した彼は、マスメディアの格好の的となり、カストリ雑誌の記者である私も、彼に群がった。

それが一回目。

二回目は、越谷氏が新しい発見があったと言うから呼ばれた。

氏の特許の中には、我々の日常生活に大きく関わっているモノもあり、越谷氏はそう言った特許によって生計を立てていた。

で、あるから、もしかしたら何か面白いモノでも発明したのなら。と、彼の元にはたくさんのマスメディアが押しかけた。

そのとき彼が提示したのは、無限エネルギー発生装置だった。彼の説明をそのまま書くところなる。

この世と霊界の境目を通過するエネルギーは、我々が霊界に簡単に行けないことから、莫大なモノであるとわかる。

しかし、この世の人間は死んだら皆、霊界に行く。その霊界に行こうとするエネルギーを上手く吸収することが出来れば、人が死ぬたびに、莫大なエネルギーを得ることが出来るのである。

彼は真顔でそう説明した。

ほとんどのマスメディアはその時点で退席し、残りのマスメディアも発明品を見た瞬間退席した。

黒いヴェールが被さっていた器械は、どう見ても扇風機だった。

私は一応最後までいて、「哀れ。元参議院選挙出馬の越谷教授、珍発明品を熱く語る」と言う記事を書いた。

だから、今回「又、新しい発明品が云々」と言う連絡を貰って、特にネタもないし、又、と言う雑多な記事の一つにでもなればいいのか。まあ、良い機会だというそれくらいの気持ちで来たのだ。

久しぶりに来た館は薄暗く、埃っぽかった。

昔、来たときにはここまで埃っぽくはなかったはずだが。

そういえば……奥さんはどうしているのだろう。姿が見えない。

「妻は、亡くなったよ」

ぼそりと、教授はつぶやいた。まるで私の思っていることが解つたかのように。

「ご愁傷様です」私はそれだけ呟くと、教授の後を歩いて行った。

「ご愁傷様か……いや、うん。まあ、そうだな」

教授はぼそぼそと何かをつぶやく。

館の奥の奥、地下室へ向かう階段を下り、私は息をのんだ。

地下室には巨大な機械があった。

ぴかぴかと銀色に光る機械は、いくつものカタマリに分かれています、そのカタマリを、配線や、ガス管のような管が繋いでいる。

一番ごちゃごちゃとした、ボタンやら、レバーやらがある中心に、小さな椅子があり、教授はそこに座った。

「君もそこに座るがいい」

部屋の端に二〇個近く椅子が並べられている。きつと、これくらいのマスメディアが来ることを期待していたのだろう。

私はその一つの椅子に座った。

一時間ほどが過ぎたが、予想通り、誰も来なかった。

この、奇怪な発明品はいったい何なのだろうなと思いつつ、何枚か写真を収めた。

「やはり、誰もワシのことなど信じてはいないか」

ぼそりと教授はつぶやき、私をみた。

「始めるが、よろしいか」教授の言葉に、私はうなずいた。

「この機械は……一体何のですか」

「天使を……」私は耳を疑った。天使。靈界に続いて、天使だ。「呼ぶための機械だ。コレで消せる人の哀しみを。……苦しみも」ぶつぶつと言いながら、教授はレバーを下ろした。ガコンガコンとモーターが回るような音がした。

キラキラと輝くものが左から右へと流れた。ウインウイン、ガシユガシユ、パチパチ。何かが奇怪な音を立てている。気にもせず、教授はいくつかのボタンを押ししたり、いくつかのスイッチをパチンパチンとオンにしたりしている。

ウヒヒヒヒヒヒヒヒヒ。ウフフフフフフフフフ。

教授の口からは奇音が漏れる。

気付くと私の襟元は汗でびっしょりだった。怖い。

ここにいたくない。

と言うのは、こんなにも。

この男は っている。

ブシュと大きな音がした。どこからか、蒸気が漏れたような音だ。

何気なく、音のする方向を向き、私は天使の正体を悟った。

吐き気がこみ上げてきて、私はその部屋からよろよろと脱出した。

マサカ。ああ、そう言えば、そうだ。

そんなことをあの男は考えていたのか。

ぐつたりと、私は炊事場の椅子に腰掛けた。少しでも吐き気を抑えるためにと、何杯か水を飲んだ。腐っているかもしれないと思い、少し躊躇<sup>ためら</sup>ったが、においをかぐ限り腐っている様子は見受けられなかった。水道はまだきちんと来ているようだ。

まあ、電気は来ているのだから、水道が来ているもおかしくはないのだが。水を飲み一息つく。フウン……幾分かはマシ　ンム……

……それでも無いか。

目を閉じて思い出す。アレは、……教授の奥さんなのだろうな。

腐敗が進み、ウジがわいていたあの緑色のカタマリは、亡くなつた奥さんなのだろう。着ていた……というより、纏<sup>まと</sup>わり付いていた布地に見覚えがある。

彼は……死んだ人間を蘇らせようとしているのだ。

天才というのは、どこかでおかしくなってしまうのかも知れない。交流電源の祖、ニコラ・テスラ。彼は、全世界にエネルギーを送る、地球システムを構築しようとして晩年を過ごした。

直流電源の祖、トーマス・アルヴァ・エジソン。彼は、死者と通信するための機械を作っていたという。

ウィーンの医者、フランツ・アントン・メスメル。彼は磁石の磁力にはありとあらゆる病気を治す力があると提唱し、最終的にはペテン師の称号を得ることとなってしまった。

フロイトの弟子、ヴィルヘルム・ライヒ。彼は雲を制御する機械、クラウドバスターを作成後、UFOを宇宙人の乗り物であると提言し、クラウドバスターによる撃墜の必要を訴えた。

シャーロックホームズの作者、コナン・ドイル。彼は、心霊学に傾倒し英国心霊現象研究協会会員となった後、「心霊主義の聖パウロ」の異名を取った。

みな、どこかずれている。

ほとんどの人は、彼らのまともな側面しか見ていないから、彼らがこういったことをしているなんて知らないだろう。

私も、教授に関していろいろ調べている内にこの事実に関がったのだから、何とも言えない。教授の提唱した霊界エネルギー変換装置は、すでにエジソンが考案していたものだったと知ったときには、妙な気分になったものである。

ふう。私は水をもう一杯飲んで、腐った死体を見たという記憶を脳の中から消したいと思った。

思い返しても、気分が悪い。

しかし、教授はまだあんな無意味なことを続けているのだろうか。少し気になった。

帰ってしまおうかとも思ったが、何となく、それも悪いような気がして、なかなか帰れなかった。

ふと冷静になり炊事場を見渡す。汚いな。と思った。当たりにはゴミやノートやらが散乱していた。

ノート。何だろうと思い拾い上げてみると、レシピだった。

彼の奥さんが生前…：生前と思い、又吐き気がこみ上げてくる…：書いたものだろうか。

そのノートの中に、一冊だけ色が違うものがあるのに気付いた。表紙にはアラビア数字で6と書かれている。

拾い上げ、パラパラめくる。

二〇〇〇年七月二四日

あの人に元気がない。せっかくの発明品を馬鹿にされたのだもの。仕方がないか。

今日は、あの人の好物である冷製パスタでも作って元気を出させてあげなくちゃ。

日記だった。二〇〇〇年の七月と言えば、霊界エネルギー受信機を発表した頃と重なる。

6ということは、まだほかにもあると言うことか。

周囲を探してみるが、見あたらない。待てよ。隣の部屋に入ってみる。隣の部屋にも又、本やノートが散乱している。



5と書かれていたノートがあった。コレじゃない。もっと後……落ちていた本やノートを漁り、14と書かれているノートを見つける。

ほかのノートと違い、このノートだけ後半のページが白紙だった。もしかしたらこのノートに……何故、彼女が死ななければならなかったのか……書かれているとしたら。

ごくりとつばを飲み、ページをめくる。

日付は、今年の初めからスタートしていた。

人の日記を見るのは、何とも、ゴシップ誌の記者のようで嫌だとも思ったが、まさに、自分がゴシップ誌の記者であることを思い出し、読み進めることにした。

おそらく、教授はもう暫く出てこないだろう。

いや、彼女が生き返るまで……永遠に出てこないかもしれない。

二〇〇六年一月一日

今日から二〇〇六年。

ちょうどノートも新しくなった。

新しい年、新しいノート。

今年はいいい年になってくれるといいなあ。

あの人は、相変わらず部屋にこもっている。もう、何日出でてこないのだろう。

差し入れの食事はきちんと食べてくれているから、健康であってくれればいいが。

二〇〇六年一月二日

おせち料理を差し入れたら、お年玉袋が挟まって返ってきた。

こういったところがお茶目なのだ。

買い物に出かけたが、軒並みお店はお休み。

正月だから仕方ないとはいえ残念。

二〇〇六年一月三日

久しぶりに、あの人部屋から出てきた。

髪の毛もだいぶ伸びていたし、服も汚れていたもので、着替えさせ、髪の毛を切ってあげる。今月末か、来月にはきちんと床屋に行こうねと約束。無言でうなずかれる。

発明も大事だけど、それで体を壊しちゃダメでしょ。

と言ったら、シユンとなっていた。

そういうところは、いくつになっても変わらない。

日に当たらないせいか、弱っているように感じた。

ちよつと心配。

二〇〇六年一月四日

髪をかきあげ、彼は私に図面を見せてくれた。  
奇妙な話をとうとうと私に語ってくれた。  
ほとんど意味はわからなかったけど、  
彼が世界を救おうとしているのは良くわかった。  
理屈は良くわからないけど、その機械が完成したら、  
死者を蘇生させることが出来るのだとか。  
それが出来上がったら、すごい。

二〇〇六年一月五日

半年振りに、彼を表に連れ出す。  
図面は出来上がったのだから、後は機械を作成するだけ。  
作成するのに必要な材料を買いに行く。  
あまりに大量の工具を買ったため、半分は送ってもらうことに。  
日の光を浴びて弱っている彼は、まるでドラキュラ。  
本当、もう少し健康になってもらわないと。

二〇〇六年一月六日

又、あの人は部屋にこもりだす。  
本当、身勝手なのだから。  
でも、研究に没頭している彼のことを好きになってしまったの  
だから、仕方が無い。

二〇〇六年一月七日

なんでもないようなことだからこそ、  
こだわってみるのがいい。  
今日は七草がゆを作る。  
がゆってどういう字だっけ？  
弱？たしか、米って漢字も使ったような。

二〇〇六年一月八日

相変わらずあの人は部屋から出てこない。  
つままないな！。さみしいな！。と扉のこっち側から呼びかけ  
るけど、返事はなし。  
つままないな！。さみしいな！。

二〇〇六年一月九日

いつか、完成するのだろうか。  
かつての恨みをまだ持っているのだろうか。  
きつと、その日まで私のことなんか見てくれないのだろうか。

二〇〇六年一月十日

今日は朝から雨。あの人も出てこないし。ぶう。  
DVDで小さな恋のメロディを見る。

あの人と初めて一緒に見に行った映画。  
銀座の映画館で、懐かしの映画特集とやらで上映していた。  
最後、結婚した二人が乗ったトロッコはどこに行ったのだろう。  
私達二人が乗っているトロッコはどこに向かっているのだろうか。

…きつと、天国なんだわ。

二〇〇六年一月十一日

雨は雪にと変わっていた。

外は一面真っ白で、あの人も呼んだけどやっぱり出てこない。  
あーあ。つまらないなー。本当に私愛されている？

仕方がないから、一人で雪兔を作って遊んだ。  
雪の中はしゃぎまわったら疲れた。  
今度晴れたら、あの人を絶対に外に連れ出してやる。

二〇〇六年一月十二日

久しぶりのお日様。

気分がいいから散歩。

嫌がるあの人も無理やり連れ出す。

別れてやるからっていつたらしぶしぶ出てきた。

私って悪い女かしら。

彼のリクエストで、おもちゃやをめぐって、おもちゃを購入。  
イナズマンとかいうマイナーなヒーローのフィギュアだ。

帰りに、お正月だからか、縁日をやっている神社を発見。

わたあめと、たこ焼きを買って食べた、

なんだか、新婚に戻ってデートしている気分。

あの人が、くじ引きをしたいと言うからくじ引きに挑戦してみ  
る。どうせ、良いものなんて何も当たらないよ。と私は笑う。

意に反して、風鈴があたった。

赤い金魚の絵が描かれている風鈴だ。

二〇〇六年一月十三日

早速風鈴を取り付けたが、

やっぱり冬の風鈴は似合わない。

まだ雪が積もっている風景に、風鈴の音はそぐわない。

はずそうと思ったら手が滑って、風鈴は割れてしまった。

割れた風鈴は物悲しい。

二〇〇六年一月十八日

どうやら風邪を引いたらしい。

高熱で倒れていたら、あの人が飛び出してきて、救急車で運ばれた。

そんなたいした物ではないらしいけど、入院して検査することを薦められる。

子供……だったらどうしよう。

名前は何にしようかしら。

何て、別に妊娠が決まったわけでもないのに。

少し熱も引いてきたので、あの人に無理を言って、日記帳を持ってきて貰った。何か、毎日書いているものを、書かないでいると落ち着かない。

と、いうわけで、これは病院から書いています。

そうだ、忘れないうちに、今の感動を書いておかなくては。

いつも引きこもっているあの人が、倒れたことを察知して出て来てくれた時は本当にうれしかった。

ありがとう、あなた。

二〇〇六年一月十九日

検査入院のため、まだ病院。

いつも引きこもっているあの人が、毎日見舞いに来てくれてとてもうれしい。このままずっと入院していただきたいかも。

なんてそんなこと思っていたら、罰が当たって、重病になってしまうかも知れない。

二〇〇六年一月二十日

体がだるい。

採血のせいかしら。

二〇〇六年一月二十一日

熱が出る。

二〇〇六年一月二十四日

数日、熱が出てぐったりしていた。

日記も暫く休んでしまったけれど、何とか体力も回復。

あと二・三日で退院できるそうだ。

早く、家に帰りたい。

二〇〇六年一月二十五日

退院。

結局子供も異常も発見されず。  
久しぶりの我が家。

毎日見舞いに来てくれた夫も、今日は一日部屋にこもりつきり。  
又倒れちゃうかもよ。って言ったたら、夕食の時だけ外に出てくるようになった。

まあ、それでもいいか。

二〇〇六年一月二十六日

久しぶりにお散歩。

お散歩モコちゃんと言ったところだろうか。

冬は日差しが柔らかで気持ちがいい。

家に帰ったら、あの人が出迎えてくれた。

まだ、病み上がりなのだから、あまりであるいちゃだめだ、  
ってすごく心配そうな顔で言ってくれた。

そんなに心配すること無いのに。

どこも悪くなかったのだから。

二〇〇六年一月二十七日

今日は変な夢を見た。

高校時代の友人だった、ザジって呼ばれていた女の子が登場して（そういえば、いったい何でザジなんて変わったあだ名だったのだろう。私が出会ったときには、もうザジって呼ばれていたのよね）、彼女が人をいっばい殺しているの。

ザジ、あんまり殺しちゃだめだよ。って私は注意するのだけど、  
ぜんぜん聞かなくて。死体の山が出来ているの。

そうしたら、暗闇の中、サーチライトが彼女を照らして。

捕まっちゃ行けない。と私は思うから、ザジの手をつかんで逃げていくと、彼女は イヒヒと笑いながら、私の手を握ってくる。

で、私達は暗い歩道を逃げていく。

モコ、お前を逮捕する。って銭形警部に言われるの。

銭形警部は追いかけてくるのだけれど、追いつかなくて。

ザジはザジで、逃げながらも人を殺しているの。

殺している人は、わかっていたけど、私だった。

ザジが殺しているのはいつも私。

ああ。やっぱり私死ぬのだなあと思ったら、目が覚めた。

涙がほおを伝っていた。

変な夢。

何かを示唆しているのかしら。

二〇〇六年一月二十八日

廊下を掃除していたら、足に痛みが走った。

この前割った風鈴の破片がまだ残っていたみたい。

今月……今年に入ってから、病気だとか怪我だとか付いてない。きやあつて叫んだらちようど後ろにあの人がいて、バカやろう、大丈夫かって。

お前はまだ病み上がりなのだから無茶するなって。病み上がりだったって退院してからもう三日もたっているのよ。って言ったら、ああ、そうだなってさびしそうな表情で。なんだろう。

研究うまく行っていないのかしら。

心配してくれるのはうれしいけど、心配されすぎるのも困りものよね。

二〇〇六年一月二十九日

機械が完成したらしい。

あの人は無邪気な子供のように喜んでいた。ほらごらん。コレで消せる。人の悲しみも。

ニコニコしながら、あの人は笑っていた。足の痛みがまだ引かない。ちよつと歩くのが億劫。

二〇〇六年一月三十日

今日はあの人一日中眠っていた。

久しぶりにゆつくりとした気分で眠れているのだろう。

二〇〇六年二月一日

今年も早いもので、もう一月が過ぎた。

最近、時の流れの速さに驚く。

この日記も書いてきてもう十年にもなるのかと思うと感慨深い。と、言うことは、あの人と結婚してもう十年になるのか。

二十歳の小娘と四十過ぎのおじさんが結婚しようというのだから、そりゃ、周囲も反対するわよね。

でも、それでも、結婚して良かったと思う。

あの子の寝顔を見ながらそう思う。

二〇〇六年二月二日

足の痛みもだいぶ引いてきて、普通に歩けるようになったので、あの子を外に連れ出す。

約束通り、床屋に言って、髪を切ってもらい、さっぱりさせる。

二〇〇六年二月三日  
節分。

久しぶりに、豆をまこうということになる。  
豆をまいている途中、あの人は何か気がなったようだった。  
なんだろう。

二〇〇六年二月四日  
朝七時にあの人の奇声で目が覚めた。  
どうしたの？と聞いたら、あの機械には欠点があるのだ。  
それに今気付いてしまった。  
というようなことを言っていた。  
又、あの地下室に籠ってしまおうのかしら。  
ちよつと心配。

二〇〇六年二月五日  
あの人が倒れた。  
心配だ。こんなのを書いている心の余裕は、無い。

二〇〇六年二月六日  
少し落ち着いた。  
今日のはあの人の誕生日だって言うのに。  
あの人はまだ目を覚まさない。

二〇〇六年二月七日  
あの人はうわごとで機械を心配している。  
意識はほとんど無いようだ。  
涙が、止まらない。

二〇〇六年二月八日  
覚悟。

二〇〇六年二月九日  
少しだけ意識が戻る。  
愛しているよ。さようなら。  
もう、だめかもしれない。  
僕の愛を総て君にやる。  
そんな事言われても、ちっともうれしくない。

二〇〇六年二月十日  
昏睡。

二〇〇六年二月十一日  
意識戻らず。

二〇〇六年二月十二日  
彼は、もう居ない。  
そして、人生は続く。

二〇〇六年二月十三日  
彼は家に戻ってきた。  
まるで、眠っているようだ。

どうということだ。

私は思わず目を疑った。これは、越谷氏の妻が書いた日記ではないのか。それとも、ここで言う、彼とは……

越谷氏の事ではないとも言うのだろうか。

私がさつき見た、越谷氏は……いや、確かに、越谷氏だった。だとすると、コレは。

震えながら日記に目を落とすと、次が、最後のページだった。

二〇〇六年二月十四日

聖バレンタインデー。

奇跡の起こる日。

もしかしたら、本当に奇跡は起こるかもしれない。

あの人の遺品を纏めていたら、あの人が最期に作った機械についての論述が見つかった。

あの機械は、人を生き返らせる機械である。と書かれている。

そういえば、そんなことも言っていたようだ。

本当に、そんなことが出来るのだとしたら。

あの人の遺体は今、手元にある。

もしも……いや、あの人の研究に不備などあるはずも無い。

私が信じなくて誰が信じるというのだ。

機械の操作法は書いてある。

彼が最後に言っていた、欠点も書かれている。

覚悟は出来ている。

昔見た映画のベティ・ブルーのように、あの人を愛している。

もし、生き返ったら、貴方は私を、ベティ・ブルーって呼んでくれるかしら。

私、貴方を、死ぬほど愛している。

だから、大丈夫。



はらりと、紙が落ちた。

教授の書いた論述の一部のようだった。

二月三日。欠点にさつき気付いた。

人を生き返らせるには、オルゴンが一定量必要である。

本来このオルゴンを空中より発生させようという目論見であったが、今の原理ではうまくいかない。

（解読不能）が（解読不能）を（解読不能）してしまうからだ。

おそらく、この機械を作動させた場合、作動させた人間のオルゴンを総て消費することとなる。

つまり、この機械を作動させた場合、人を生き返らせるのと引き換えに、作動者が死んでしまうこととなる。

大いなる欠点だ。

オルゴンを手に入れるためには（解読不能）が（解読不能）である必要がある。

その開発にはさらに数ヶ月の研究が必要だろう。

急がなければ。

末期癌に侵されたわが妻がまだ、健康であるうちに。

まさか。私の背中に汗が伝う。

脳裏に映像が浮かぶ。

機械の前に、越谷氏の遺体。機械に手をかけるその人は、彼の妻。

狂気に満ちたその目で、今、彼女が空に向ける機械は

ガタンという音がした。

「見てしまったのですね。そう、私は……」

私の背後から女性の声が出た。恐怖心を無理やり押さえ、振り向くとそこに居たのは……越谷教授の妻、越谷摸子……地下室にあつた遺体……その人だった。

死人の口が動く。

「一度死んで、生き返った」

冷たい声だった。地獄からの声というのはこんな風なのかもしれないと思いつつ、私は恐怖感に刈られ、気付いたら自室の布団の中に居た。

どうやって山を降りたのかもさっぱり思い出せなかった。

途中、越谷教授が「どうだい、これが私の発明した天使を呼ぶ機械だよ。欠点は、もう、無い」と言っていたような気がする。

ダクダクと流れる汗は布団をびしょぬれにし、私はその夜、一睡も出来なかった。

昼過ぎにやっと眠りについた。夢に出てくるのは悪夢だった。

死体が、唾わらいながら。

二・三日して落ち着いて考えてみると、二つの考えが浮かんだ。  
一つ目の考えは、あれは、越谷教授が私を嵌めようとしたのではないかという考えだ。

本当は奥さんも生きていて、過去にゴシップ記事を掲載した私を嵌めるために、二人でドッキリを仕掛けたのではないかと。

私は実際に教授が死んだところを見たわけではない。

あの遺体は、作り物で、私が日記を見るように仕向けたとしたら。もう一つの考えは恐ろしい考えだった。

本当に人を生き返らせるとして、その、オルゴンとやらはどこから捻出するのか。

空気中からというのは聊いさか荒唐無稽な気がする。だとすると、それはやはり人の命から捻出されるべきではないか。

マスコミを集めたのは、各人の持っているオルゴンを集めるためだったのではないか。

結局、マスコミは私しか集まらなかったわけで……ならば私のオルゴンは、少なくとも常人の三分の一欠如していることになりはないか……。

いや、人が生き返るなんて、そんなバカな。

自嘲気味に私は笑い、再びあの屋敷を訪れてみたが、屋敷には誰も居らず、日記も、レシピノートも機械もすでに無く、ただ、屋敷があるだけだった。

額から流れる汗が服を伝った。

屋敷はやはり、ひんやりとそこに建っていた。